令和５年度
伊丹市　認知症地域支援推進員活動報告

認知症地域支援推進員について

1　認知症地域支援推進員：１名

2　認知症地域支援推進員の役割

◎医療・介護・地域支援サービスの連携を図るためのネットワークの構築および強化

- 専門職間のつながりと今後の体制づくりを検討する「認知症ケア多職種研究会」の開催
- 認知症ケアに関わる専門職を対象とした「認知症ケア多職種協働研修」の開催
- 地域ケア会議における専門的な見地からの助言
- 認知症初期集中支援チームの活動支援
- 市内の認知症疾患医療センターとの連携による事業の拡大
- 認知症かかりつけ医や認知症専門医、市外の認知症疾患医療センターとの連携による個別支援

◎認知症の人やその家族への早期支援を目指した相談支援体制の構築

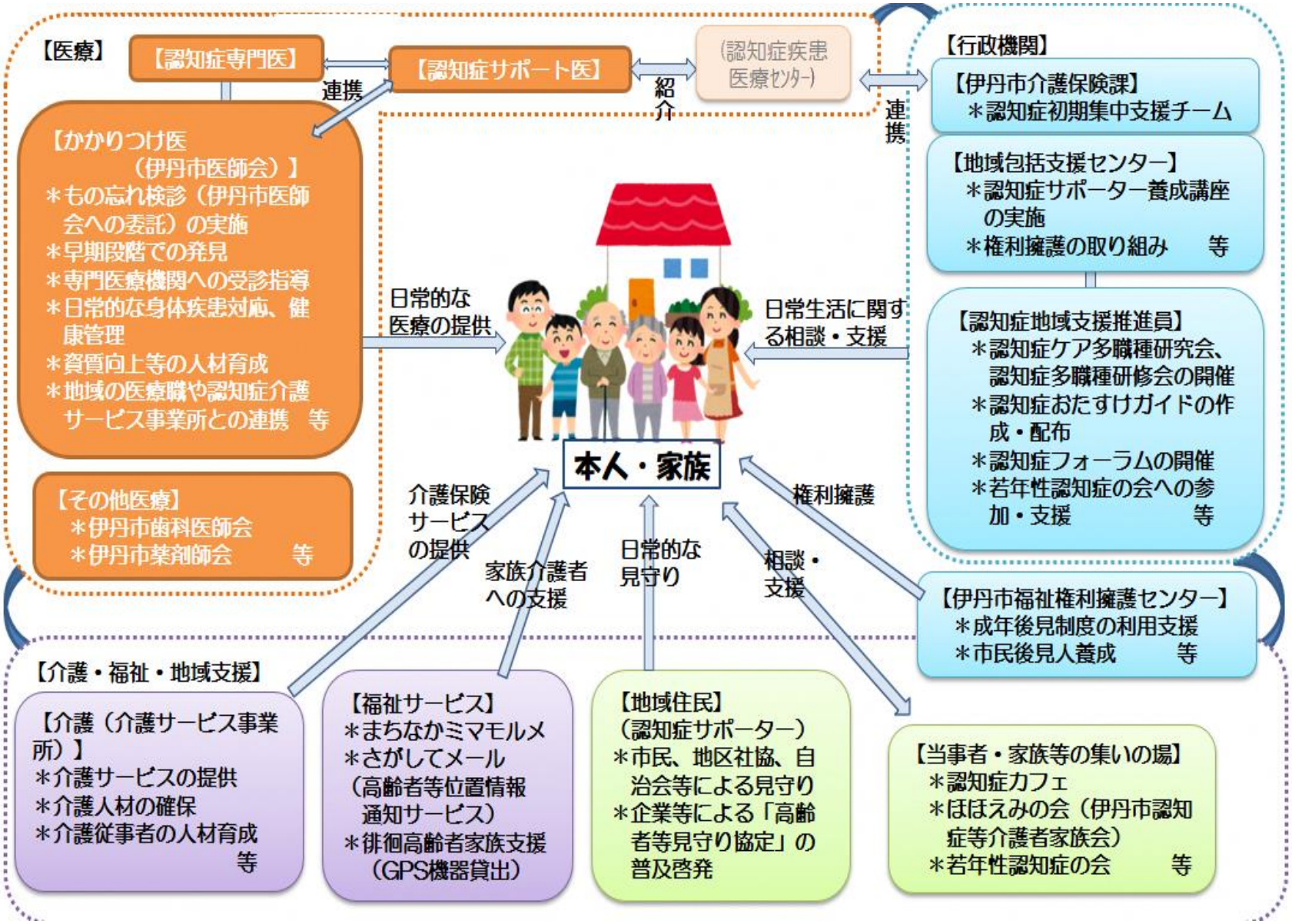
- 認知症カフェの立ち上げ支援および本人や家族支援の検討
- 当事者会、家族会、ボランティアグループとの連携および活動支援

◎地域への普及・啓発事業の企画および実施

- 市内全域を対象とした認知症サポーター養成講座の実施
- 認知症キャラバンメイトや認知症サポーターの活動創出およびフォローアップ
- 市民を対象とした認知症フォーラムの開催

報告者氏名:●伊丹市地域包括支援センター　認知症地域支援推進員　田中 友紀
●伊丹市　介護保険課　中島　千里

伊丹市　認知症施策全体図



標題⑤【認知症疾患医療センターとイベントの協働開催】

「第2回いたみオレンジフェア
～認知症、1人で悩まず共に繋がろう～」

開 催 日 時：令和5年10月2日(月)14:00～16:00

共催の経緯：昨年度、市内の認知症疾患医療センターが、世界アルツハイマーデーに合わせた認知症啓発イベントを企画。市および認知症地域支援推進員に共催依頼があった。地域住民に向けた普及啓発は大切な活動であるため、協働で実施した。引き続き今年度も、内容をブラッシュアップして開催した。

開 催 目 的：市民が認知症に関する知識や相談窓口および医療機関について知ること。また、認知症について1人で悩んだり抱え込まないように公的な相談機関の他、地域の社会資源を知り、繋がる契機にする。

参 加 対 象：伊丹市民(31名来場)

●役割分担

機関	事前準備	当日の役割
認知症地域支援推進員	●認知症カフェと家族会代表者への協力依頼(パネル掲示の為) ●案内チラシの作成 ●ＰＲと参加申し込み受付 ●掲示用パネルの作成 ●講師との調整	●会場設営 ●司会進行 ●個別相談対応 (地域の社会資源)
市(介護保険課)	●会場予約(減免申請) ●パンフレットや介護保険の手引き等展示物の準備 ●事例(寸劇)の練習	●会場設営 ●受付 ●事例(寸劇)の役者として出演 ●個別相談対応 (介護保険制度)
認知症疾患医療センター	●疾患医療センターのリーフレット等展示物の準備 ●掲示用パネルの作成 ●講義資料の作成 ●事例(寸劇)の練習	●前半の講義 ●事例(寸劇)の役者として出演 ●個別相談対応 (症状・治療・対応等)

前半

講義「認知症の症状について」

医師による講義を実施。冒頭で認知症はどのような病気か、正しく理解することの必要性を伝える。次に代表的な4種類の認知症の症状について説明し、家族だけでなく支援者、地域で本人・家族を支える大切さを伝える。

常設

「展示・資料コーナー閲覧＆質疑応答」

認知症に関する相談窓口や集いの場に関する資料、書籍などを閲覧できるようにした。また、スタッフが認知症に関する質問や相談に乗り、情報提供や必要な相談窓口を案内した。

後半

ロールプレイ（寸劇）「認知症の方への接し方」

●会場前方に舞台を作り、3つの寸劇を披露する。
●1つの寸劇につき、悪い例と良い例を見せる。
●推進員と医師は舞台端に座りコメントする。悪い例の後に、医師から適切な対応について助言してもらう。その後助言に沿って良い例を再現する。

テーマ	ストーリー	登場人物
「財布がない」 	アルツハイマー型認知症により記憶力が低下した義母と息子の妻とのやりとり。財布を失くしたと探し回る義母。誰かに盗られたと思い込み、2人で口論になってしまう。	○認知症の義母(包括職員) ○息子の妻(市職員)
「居ないものが見える」 	レビー小体型認知症により幻視の症状が現れる父。食事の時、テーブルの上に虫がいると言い、息子が否定しながら対応したことで父を興奮させてしまう。	○認知症の父(センター医師) ○息子(センター心理士)
「道に迷う」 	認知症により、外出して家に戻れなくなる父と娘とのやりとり。近所の人が見つけて送り届けてくれるも、気づくとまた外出してしまう。※医師よりアルツハイマーと前頭側頭型認知所の違いも言及	○認知症の父(センター長) ○娘(センター言語聴覚士) ○近所の人(センター相談員)

【まとめ】

●令和4年度 第1回の共催を企画・無事終えられたことが互いの成功体験となり、更に良いものを作ろうという気持ちで臨むことが出来た。

●疾患センターの強みは医療者としての知識を提供できることである一方、市・推進員の強みは全体の構成の立案や各団体への協力呼びかけである。今回は疾患センターよりロールプレイの提案をいただき、内容や配役は推進員が考え、メンバーそれぞれからも意見をもらいながら作っていった。医師やセンター職員、市・包括職員自ら認知症の方への接し方を劇として見せたことで、参加者の方に興味を持って見ていただくことが出来た

最後に…

今回のフェアは認知症理解の普及・啓発を目的とし、市民を対象に開催した。今後も普及啓発に加え、さまざまな視点を持ちながら活動していく必要がある。１人暮らしの認知症高齢者、若年で発症したことで制度の狭間に陥り易い人など、対象者も個々の課題もさまざまだが、それに対してどのような仕組みが必要か考えていきたい。そのために医療・介護・福祉の関係機関、地域住民、その他団体と共に共有・検討できる関係性を大事にしていく。

【その他 実施・参加した事業】

●認知症サポーター養成講座
●認知症サポーターステップアップ講座
●4市1町合同キャラバン・メイト研修（近隣市の担当者と協力）
●認知症多職種協働研修（市内の専門職を対象）
『認知症の初期の方へのアプローチ』（川崎医科大学教授による講義）
●認知症ケア多職種研究会
医師会・歯科医師会・薬剤師会、ケアマネジャー、民生委員児童委員、家族会、認知症疾患医療センター、キャラバンメイト、社協等それぞれの団体より選出されたメンバーで構成され、認知症にまつわる市内の課題について共有・検討する。
●市内のボランティア団体への助言・協力（認知症理解の普及啓発のためのグッズ作成協力等）
●若年認知症の会への協力（助言・情報提供等）
●医師会主催の認知症対応向上委員会への参画
●認知症初期集中支援チーム会議への参画　　等